



災害ユートピア 即席の楽園、実は一過性 日ごろの関係作りが重要

山梨大学地域防災・マネジメント研究センター長
鈴木 猛康

災害史のあちこちに顔を出す「楽園」

被災して不幸のどん底にありながら、人は見ず知らずの人に手を差し伸べ、見ず知らずの人と助け合うことができます。自分の行動の正しさ、自分自身の価値を認識し、自分が世界の中心であるかのように錯覚し、意識を高揚させる束の間の楽園を、災害社会学では災害ユートピアと呼んでいます。災害ユートピアは和訳で、オリジナルはレベッカ・ソルニットによって名づけられた A Paradise built in Hell (地獄の中で形成される楽園)、あるいはExtraordinary Communities that arise in Disaster (災害時に現れる臨時の共同体)です。2011年東日本大震災では、東北地方のみならず首都圏にも、多くの災害ユートピアが出現しました。

ノンフィクション作家のレベッカ・ソルニットは、1906年サンフランシスコ地震から2005年ハリケーン・カトリーナまでの地震、大火、停電、テロ、ハリケーン、大雪等、災害時の被災者の実体験を調査・分析し、見知らぬ人同士が力を合わせ、惜しげもなく食糧や物を分け合い、自分に求められる新しい役割を探して行動する、国や災害の種類に関わらず被災地に共通して現れる楽園を、災害ユートピアと定義しました(図は和訳の表紙)。災害ユートピアの特徴として、通常の世界生活に戻り始めると、それまでのことがなかったかのように、共同体は崩壊して他人同士に戻ってしまうことが挙げられます。

11年3月11日午後2時46分、私は東京・駒場

図 「災害ユートピア」の表紙



の東京大学生産技術研究所で東北地方太平洋沖地震の揺れを体験することになりました。帰宅するために最寄りの小田急・東北沢駅から電車に乗り込み、2時間かけて経堂駅まで移動できましたが、その後電車は運行再開のめどが立たず、駅に停車したままでした。私はこれを貴重な体験と捉え、車内で展開される災害ユートピアを注意深く観察しました。

東日本大震災では東京の電車内にも出現

ドアを閉め切った車内では、それまで静かだった見知らぬ乗客同士が携帯電話で入手した地震や津波の情報を伝えあい、高齢者や女性に席を譲る光景が見られるようになりました。少し時間が経過すると、トイレに行くため、飲み物を買に行くため、あるいは運行再開が大幅に遅れることを見越して夕食の弁当やおやつを買って求めて駅構外のコンビニへ行くために、席を立つ人が多くなり、

その都度荷物の世話を隣の乗客に依頼する光景が見られるようになりました。また、高齢者に水や食べ物を譲る光景も見られるようになりました。駅構外のコンビニ情報が見ず知らずの乗客間で交換されるようになった頃、ある大学生と思われる青年が携帯電話の携帯式充電器を近くのコンビニで購入してきました。それを見た高齢の女性が、「あら、いいわね。私、電池切れで電話かけられないの」とつぶやきました。すると、その青年は、「僕が買ってきましょうか。まだ、ありましたよ。」と言い、女性から1000円を受け取り、「他に必要なものはありますか?」と女性に確認しました。「あら、優しいのね。あなたは」と女性は青年に言葉を返しました。



2011年3月11日深夜の経堂駅ホーム

紹介したのは、経堂駅に着いてから車外に出されるまでの2時間程度の中に、実際に私が目にした光景の一部です。田舎だけでなく都会でも、まだ日本人のいたわりの心、助け合いの精神は絶えることなく生き続けていることを実感し、日本人は素晴らしいな、と心温まる思いでうれしくなりつつ、なるほど帰宅難民となっている車内も被災地であり、ここにも災害ユートピアが現れていることを実感したのでした。このとき、車内の乗客たちは、いつ動くかわからない電車に乗り合わせた運命共同体となっていました。写真は、乗客が車外に出された後の経堂駅のホームを、私が撮影したものです。

このように、災害時に被災者は共同体を作り、助け合い、自分の役割を見つけ、喜んで他人のた

めに活動します。ただし、これはあくまでも一過性の現象です。避難所にも開設当初は災害ユートピアが生まれ、秩序ある避難所運営が行われますが、時間の経過とともに災害前の社会生活に戻り始めると、避難所内で様々な衝突が発生したことが過去の災害で報告されています。したがって、日ごろから強い地域コミュニティを形成しておく必要があります。11年東日本大震災では、被災地の東北地方の皆さんの我慢強さもさることながら、それ以上に被災地の地域コミュニティの強さが、過酷な避難生活を乗り切るのに役立ったと、私は考えています。

婦人会活動度と避難所運営の巧みさが一致

アメリカの政治学者ロバート・パットナムは、ソーシャル・キャピタルを人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることのできる「信頼」、「規範」、「ネットワーク」といった社会的仕組みの特徴と定義しています。ソーシャル・キャピタルは、社会関係資本と訳されています。資本というと、金融資本(お金、株式等)、物的資本(土地、設備等)、人的資本(教育の程度や健康状態等)が一般的です。これに対してソーシャル・キャピタルは、人間関係の豊かさこそが社会の資本ととらえるソフトな概念で、地域力あるいは社会の結束力を意味しています。地域における人のつながりが密であれば、そのコミュニティが防災を目的として結成された自主防災組織でなくとも、災害時の安否確認や救助支援等の助け合い(共助)を円滑にするであろうことは容易に想像できます。例えば、07年新潟県中越沖地震で、婦人会活動度と避難所運営の良し悪しの間に高い正の相関があったという報告があります。

11年東日本大震災では、IT企業によるボランティアな支援活動に、多くの若者が協力して被災地の安否確認を支援する等、これまでになかった災害ユートピアも生まれました。しかし、一過性の災害ユートピアに頼りすぎるのは禁物です。辛抱強く地域コミュニティづくりを行い、ソーシャル・キャピタルを豊かにすることが大切です。G